

Title	ホツブハウス教授逝く
Sub Title	
Author	生形, 要
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.10 (1929. 10) ,p.1501(121)- 1529(149)
JaLC DOI	10.14991/001.19291001-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19291001-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は全理論體系の中に於て些細なる意義を有するにすぎぬ。彼れの平衡價格論は、價值論を前提とせざるのみならず、却つて、價值原因の存在を信ずる思想の誤謬なることを指摘するに與つて力があつた。平衡價格の成立を最も重要視し、經濟問題の總ての未知數が經濟的平衡の一切の方程式に依據すると説く彼れの所説は、假令これに反するが如き論述明言があるにも拘らず、ワルラス學説を理論的に研究するもの信憑すべき重要な所論である。ワルラスの後繼者バレットオが限界效用説を棄てて、撰擇理論の上に價格論を説き、明らかに價值論の無用を力説して平衡價格論の擴充を企圖するに至つたのは蓋し自然の道程であらう。

この故に、カッセルはある意味に於てワルラスの後繼者と謂ふも強ち過言ではないとの結論に到達する。必ずしも兩者が同一理論を開陳したと謂ふのではない。ワルラス學説の中に於て相矛盾するが如き理論を整理し、重要な意義を有する學説を採れば、カッセルの説く所と同一なるのみならず、遙かに精細なる研究が試みられて居ると謂ふのである。即ちカッセルは、ワルラスの平衡價格論を通俗化し、而して理論の統一に於ては當然ワルラスの説くべかりし價值無用論を明言したのである。

(昭和四年九月十五日稿了)

ホ ッ プ ハ ウ ス 教授 逝 く

生 形 要

左の一篇を草したのは、一に、ホップハウス教授の靈を奉吊せんと欲する筆者の微意に他ならない。卒爾、教授逝去の報に接し、十分推敲の暇なく、研究行論の徹底を缺くの止むなきに至れる事に就いては、特に讀者諸賢の御諒察を乞ひ、猶、叱正を受ける事が出来れば幸ひの極みです。

- 一、序
- 二、彼の生涯
- 三、認識論上に於けるホップハウス
- 四、社會哲學上に於けるホップハウス
- 五、社會思想上に於けるホップハウス
 - A 社會學に關する彼の立場
 - B 社會に關する彼の見解
 - C 彼の自由主義及び社會主義
 - D 彼の「調和の原理」

一 序

突如、六月二十七日附英紙 The Times Weekly Edition は、英國社會學界の耆宿たる、L. F. Hobhouse 教授の長逝を傳へて居る(註一)。教授の死は多數の研究家を有する我が國の學界にとりて

も亦、大きな悲しみでなければならぬ。

英國自由主義最後の理論家として敬慕されたる故教授は、理想的新自由主義に更生した一八七五年以後の英國思想界から、歐洲大戰時代の社會民主主義に移らんとした轉形期に於て、最も旗色鮮明なる思想的貢献をなせし學徒であつた(註二)。

英國社會學界に於て、長老 Herbert Spencer (1820-1903) 逝つてこゝに二十七年、爾來 Hobhouse の如き稀に見る宏大なる思想體系の持主は他にあるまじきと思はれる(註三)。

今此處に Hobhouse を捉へ來れる所以は、先づ第一に、形式的見地より考察してその思想體系の規模の宏大なるによる(註四)。概して云へば、彼は Theory of Knowledge, Metaphysical Theory of the State に於て認識論を説き、Mind in Evolution, The Rational good に於て人性論を、Morals in Evolution, Development and Purpose, The Rational good に於て道德哲學を、Social Evolution and Political Theory, Liberalism, Elements of Social Justice に於て社會哲學を論じ、而して The Labour Movement, Democracy and Reaction, Liberalism, The Material Culture and Social Institution of the Simpler People, World in Conflict, Questions of War and Peace, Elements of Social Justice, Liberalism, Social Development に於ては社會思想を論じてゐる。

右に依つて知らるるが如く、氏の思想は大規模の體系を整へたる事に於て、現代世界に於て注目すべき學績である。

第二はその内容的見地から察知すれば、彼が實在論 Realism の提唱者たること(註五)、社會主義と自由主義とを併せ有せんとすること(註六)である(註六)。

もと十九世紀後半より二十世紀に亘れる英國理想主義哲學——此の運動の中心人物は Thomas

Hill Green (1836-1882) である(註七)。——は啓蒙哲學並びに功利主義への反動として Oxford 大學を中心として起つたものである(註八)。彼等の思想は歴史的勢力を持続したのであるが、最近に於て始めて之に對する非難が各方面から現れた。即ち

(A) 理想を建設せず徒らに現實を理想化して考ふとの非難。

(B) 事物をありのままに論ぜずとの非難(註九)。

(C) 余りに主知的なりとなすの非難(註一〇)がこれである。

換言すれば、第一は、あくまで實踐的なる個人的立場の高調これである。即ち彼等は個々別々の個人的精神が考慮せらるべき凡てであることさへ考へた(註一一)この倫理を赴くがまゝに赴かしめたるは即ちプラグマティズムであつて、C. S. Schille (1864) の Humanism は即ちこれである(註一二)。

第二は、實在論の力説これである。即ち、かの經驗的なる諸々の自我が一つの完全なる凡てを包括する永久的自我の斷片的表現なりとするも、斯くの如き自我の二重の區別は、畢竟或はすべてを我の意識とするか、或は經驗を越えたる外界を置くに至るか、いづれかの見解に陥らざるを得ないを見て——斯くの如きは凡べて知識を内的關係イナナー・リレーションと見て——如何なる精神からも獨立して存在する對象を考へざるこの必要の結果なりとし、知るものと知らるゝものとの關係に就いて解釋を與へんとするもの、これ新興の實在論の精神である(註一三)。

斯くして、其處には必然的に經驗論の認識論即ち——個人的、發生的、客觀的、事實的、實踐的、問題的なるもの(註一四)と功利主義の道德哲學とを顧みる運動が起らざるを得ないのである。

Hobhouse は其の思想體系を一貫してこの輓近の傾向を示すものであり、こゝにその研究の内容

價があると云へる(註二五)。

凡そ如何なる大思想家と云へども、其の時代と云ふものを超克する事は出来ないであらう。それは二重の意味に於てである。即ち、一は當面の社會事情に依る制約である。他は其の時代が大いなる歴史の流れに於て占むるところの位置に依る制約である。ホップハウスの存在は、時代の子としての刻印を捺した人類發展の流れに依つて、時代の影響を彼自身の仕方に依つて消化した上に、彼の個性的統一を與へたる生命發展を通じてこれを再び時代の現在と未來との流れに投げ返した彼の生涯に依つて歴史の意義を持つのである。この意味に於て、今 Hobhouse の思想體系を検討するに當つて、先づ第一に彼が位置を占めたる時代が如何なるものであるかを明らかにする必要があるであらう。

アメリカの金坑發見が英國に齎らせる結果は一八五二年より始まつた貴金屬の豊富なる供給即ちこれである(註一六)。而して之れに續ける二十ヶ年間は物價上騰及び未曾有の富と繁榮との時期であつた。英國の商工業は絶えず進歩し斯くて一八七〇年以來英國資本主義はその内國資源と外國貿易とに依存して坦々たる生長的向上線を辿つたのである(註一七)。

而して社會主義は——一八三〇年及び一八四〇年代に於ける英國社會運動は、所謂「社會主義」と温情主義と自由主義との三巴の形相をなして、激流に抗してゐた(註一八)——全く衰滅し、そして一八四八年乃至一八五〇年に於て嘗て無い程の活氣を呈したる社會主義文献でさへも一八五三年以降は其の姿を匿し、一世代後の一八七三年に於て産業的繁榮策が重大なる打撃を被りたる時まで遂に復活する事がなかつたのである。一八七三年に襲來せる經濟界の不況は工業資本主義發展段階に於ける單なる沈滞ではなかつた。そは實に英國産業の基石の動搖を、即ち資本主義の内的機構の變質を意味し、勞働者に取りては一八八〇年代以後の社會主義の復活を——たとへ復活せる英國派社會主義が純然たる外來的のものであつたとはいへども(註一九)——そして資本家に取りては近代帝國主義の展開を意味したのであつた(註二〇)。斯くて帝國主義資本家の搾取方面轉換、並びにそれに併ふ被壓迫民族の反帝國主義運動が行はれたのである(註二一)。

かくて一八七〇年以後の、特に一八八五年以降の英帝國のすばらしき海外領土政策は相當重要な眞の白人植民が企圖されてゐない所の地域の征服併合を促進することに、殆んど全く吸収されてゐた(註二二)。即ち一八六四年に生れたる我が Hobhouse が文筆の國へ旅立ちせる頃は、將にこれ世界の資本主義國家が漸く近代帝國主義の時代へ這入らんとせるの秋であつた(註二三)。

今彼自らの述べる所に依つて(註二四)當時英國の雄々しき姿を顧みるならば、自由貿易、平和、節約、自治、民主的進歩の代りに保護貿易、戦争、浪費、強制徴兵、植民地征服擴張、專制政治、階級立法が地を占めて居た時であつた。斯くの如き社會事情と共に人道主義——功利主義——の哲學に對する知的反動の滔々たる激流が各種各貌の形相の下に存立して居たのである。即ち、或は宿命論に、或は自然淘汰に、或は鐵血政策に藉口した反動思想の或るものが階級利害と結束して近代の文明的進歩の標識を打ち毀さんとして、將に、その猖獗を逞ふせるの時代であつた。

然らば Hobhouse 教授其の人の經歷は如何なるものであつたか。

註一 六月二十三日發行 Sunday Times, 六月二十九日發行 London News, 八月三日發行東京日日新聞、八月十四、十五日東京日日、並びに六月二十四日廿七日附 The Times 等該記事參照。因みに Illustrated London News, vol. 174, No. 4706, June, 29. には教授の肖像が出て居る。

註二 八月三日東京日日該記事。「逝けるホップハウス教授」(加藤正男氏執筆)。

註三 岩崎卯一氏 社會學の人文獻 p. 347 松本潤一郎氏 英米社會學(大思想エンサイ一三卷) p. 150. Hobhouse の

社會學は英國現代の社會學を最もよく代表するものを見なくてはならない。定て Hobhouse の思想體系は Plato, Mill, Spencer, Green の綜合的調和であらう。若くして Kant, Hegel に強く導かれたりすれば云々、氏の社會哲學は Comte, Ward, Mill, Spencer の色彩を帯び、特に Mill の自由主義及び經驗主義、Spencer の Realism の影響を受けて居る。氏の社會科學の歸結は Gaston Richard と類似して居ることは確かである。氏の綜合社會學は——舊型百科學の歴史哲學的社會學體系——A. Comte, H. Spencer, W. Bagehot, L. F. Ward, G. Tarde を連つて居る。現代に於ける科學の基礎をなすものは進化の觀念なりを考ふる事に於て氏はダーウイン先驅の一團(ツォルン・ライヒル・ランブ・トーマス・パツンマン・ライルク)並びに Darwin 及び Spencer にこれを學び、而して又 Bagehot, Macdougall, Wallas の社會心理學説をも受け入れて居る。

人類學者としての氏は和蘭派社會人類學者・メタイン・メツツ及びヒポリア等と同様なる進化段階の考察を行ひ而して、Maclver, Cole の共同生活體説、Vierkandt の人的關係説、Tonnis の社會の內容ツツの Gemeinschaft, Maclver, Russell の多元的國家理論、Müller-Lyer の社會發達の史的段階の分類 Phaseologie に接近して居るもの如くである。

又調和統一を善とする事に於て Bradley, Green を類して居る。以上に依りても、大體に於て知らるるが如く、Hobhouse の社會學——(具體的一般社會學)——はその由來する所遠く深く、その包攝する所も極めて廣大である。

實に、氏の學問的洞察は深遠該博であつて、質量何れの點から觀ても、社會學界近時の目覺しき收穫であることは何人もこれを否定する事はできないであらう。——關與三郎氏「社會學」(ホッソンスの社會學説) p. 2——

註四 河合榮治郎氏 英國派社會主義 p. 148
註五 E. K. Rogers: English and American Philosophy Since 1800, A Critical Survey 1922. 松本潤一郎氏 現代社會學 説研究 p. 322.

註六 H. E. Parnes: Leonard T. Hobhouse and the Neoliberal theory of the State (p. 442-485) —The American Journal of Sociology, January 1922. xxvii—及び月田武雄氏 ホッソンスの思想體系(經友「二」號)一頁。
註七 大島正徳氏 近世英國哲學史 p. 340

註八 經濟學論集 第五卷一號 河合榮治郎氏 英國理想主義運動。

註九 理想主義が第二に受けたる批難は Bosanquet の如く國家を以てあらゆる市民の道德的意志の自由なる承認と協同とに基くものとす事は現代の世界に於いては知る能はざる事であつて、理想主義者は事物をありのままに見ざるものであるを云ふことであつた。

註一〇 凡そ社會及び國家に關する見解は、その内に或る人間觀を前提とする。此處に理想主義の主知主義に對する非難があるわけである。理想主義は餘りに多くのものを意識的意志と理性ある精神とに歸したといはれる。人間には確かに意志と理性の領域が存在する。が然し人間も亦自然淘汰と進化の渦中に置かれた自然の一部分である。又人間は意識的理性と共に衝動、情緒、本能をもつものであり、そこに暗示が働き聯想が行はれ模倣が發達し習慣が生ずる。されば此の領域に對して社會心理學者はその先鋒を向けた。我が Hobhouse は Idealist が稍もすれば理念として人間を見るに急にして現實のあるがまゝの人間を看過したるに對して是等の社會心理學者と共に反對したのであつた。猶 Hobhouse を社會心理學者との關係を就つては Macdougall: group mind の緒言を参照せられたる。尙(A) (B)(C)の三分類を就つては E. Barker: Political thought from Spencer to Today p. 80-83.

註一一 三浦藤作氏 倫理學説講義 四三〇—四三一頁。

註一二 木下一雄氏 現代哲學要論 四二—頁。

註一三 大島正徳氏 經驗派の哲學二九二—二九三頁。人格的理想主義なる名を以つて呼ばれるのは第一と第二との立場を併せ唱ふるものであつて、ホッソンスやクレメント・ウェンも亦これに屬するが上述の如く第一と第二との立場は英國哲學の傳統であつて多くの場合、この兩者は結合してゐるもの如くである。

註一四 James Seth: English Philosophy and Schools of Philosophy 1912.

註一五 輓近の傾向、即ち英國現代思潮の主なるものは(一)國家至上主義反動としての自由主義及(二)所謂「社會主義」の反動としてのギルド社會主義(サンディカリスムの影響の下)であらう。實に Hobhouse は J. A. Hobson を共にその第一の代表と目されてゐて彼等は、個人的自由主義及多元的國家理論を取り入れてゐる。猶河合榮治郎氏著 在歐通信(p. 63-67)には英國最近社會思想を四分して居られる。即ち

(1) 自由主義の復活	Hobhouse
(2) Idealism の反動としての社会心理学派	G. Wallas Madoxgall Maitland
(3) 国家主権の反動としての集團人格説	Figis G. H. Cole H. Laski
(4) Guild-socialism	G. H. Cole B. Russell A. J. Penny S. G. Hobson Orage

英國現代の四潮流

註一六 山川均氏 資本主義以前經濟史 pp. 143-173.

註一七 渡邊幾次郎氏 現代歐洲政治及社會史 p. 387 船舶の噸數は一八七〇年より一九一〇年の間に實に従前の二倍以上に達したるが如きはその事情を示す。——本位田群男氏著、英國經濟史要、一八六——一八七頁参照せられたい。

註一八 上田貞次郎氏 近世商業史 p. 81.

註一九 A. Menger: The Right to the whole Produce of Labour. Introduction. Section iii: The English School of Socialists. xv-cii. 森戸辰男氏譯 全勞働收益權史論 pp. 493-494.

註二〇 河合榮治郎氏著一八七〇年代の英國勞働界 經濟學論集 6 の 1 (pp. 24-25) 十九世紀後半に於いて英國資本主義は帝國主義の段階に入つた。斯くて階級對立は漸次激化し、組合運動は不燃練勞働者の手に移り、一八九三年最初の無産政黨即ち獨立勞働黨が組織されるに至つた。

註二一 ハンロキッチ、上田茂樹氏譯 帝國主義の經濟的基礎——参照せられたい。英國帝國主義の初期に於ては、辛くも資本家は植民地擲取の「配分」を以て内國勞働者を「買収」することによつて、階級對立を緩和せしめ、その政治的進出を二十世紀の初頭まで抑制することが出来た。

註二二 J. A. Hobson: Imperialism. 社會思想全集、三五卷 p. 717

註二三 その頃は、恰も社會問題が目新しく出て來た時であつて、いはゆる新思想が青年の胸を芽ばらしてゐる時であつた。社會主義は段々喧傳されるやうになつた。その實行の方面に於ては、Hyndmann 等の社會的民主的聯盟がより、

註二四 その知識的方面では、新しく進められた Fabian society の宣傳が行はれて居た。
Hobhouse: Democracy and Reaction. p. 55, p. 95.

II 彼の生涯 (及び主要文獻)

Leonard Trelawny Hobhouse (1864-1929) Hon. D. Litt. Durham. 1913. Hon. LL. D. St. Andrews. 1919. M. A. Oxford. The Late Martin White Professor of Sociology in the University of London and Fellow of the British Academy (F. B. A.)

彼は一八六四年(元治元年)の冬英吉利の名門 Hobhouse 家に生れた(註一)。彼の尊父 Venerable Reginald Hobhouse は Cornwall 教會並びに Trelawny の Archdeacon (副僧正)として、小地主の貴族であつた(註二)。又 Caroline Bodmin の Archdeacon をも兼ねてゐた嚴肅そのもののやうな牧師である。彼の慈母 Caroline Hobhouse は Sir William Trelawny の愛娘であつて冒險好きなケルト族の血が流れてゐた(註三)。

一八九九年 Boer 戦争(英國・トランスヴァール共和國間)に際し單身南阿に航して植民地を視察なし、歸國後、熱心に非戰論を説いた彼の姉 Emily Hobhouse (註四)は教授の生涯の前半に影響をあたへし事大なる人である。社會運動に關する Hobhouse 教授の功績の一半は彼の姉 Emily に依るものと云ふべきか。

而して斯くの如き兩親及姉を持つた彼 Leonard Hobhouse が、長じて、Oxford に學んだ頃は Spencer の進化論及び Green の理想主義が其の絶頂に達して居た時代であつたのである。

進んで、Marlborough College の "Upper Sixth" に入つてから彼はギリシヤ、ラテン及び歴史の研究を始めた。而して社會運動や哲學、殊に Hegel の歴史哲學の研究に興味を感じたのも、その頃であつたと云はれて居る。一八八〇年 Oxford 大學に進み、一八八三年より一八八七年にかけて

under-graduate として社會政策の問題に心酔し、Spencer に傾倒して、猶 Green に心を引かれて居たのである(註五)。

一八八七年二十三才の折、彼は Merton College の Fellow となつたが、一八九〇年 Merton College より Corpus Christi College (Christ Church College) の assistant Tutor に進んだ(註六)。翌一八九一年彼は G. B. Haldwen の娘 Nora と結婚した(註七)。一八九四年 Corpus Christi College (C. C.) の Fellow であつた(三十歳)頃、Oxford 附近の貧しき農民のため農民組合設立に盡す處があつた。斯かる事情のため、Oxford の傳統的なる Tory の保守主義とは意見を異にしてゐたのである。當時、即ち社會運動に關係せし頃の著作としては The Labour movement (1893) と The Theory of Knowledge (1896) 等がある。一八九七年齡三十三にして自由黨の機關紙にして又英國自由主義の牙城たる Manchester Guardian の編輯長 C. P. Scott 氏及び大學の舊友數氏の薦むる處となり、同紙の論説記者となつた。而して同紙を通じ英國帝國主義及び南阿戰爭(1899-1902)に反對した(註八)。

彼の論説は Manchester 地方の指導精神であつた。斯くして彼の五年間に亘る操觚界の生活が續いたのである。一九〇〇年 Manchester に滞在中 Owens College (現在の University of Manchester) の社會學の教授となり、英國に於ける Comparative Psychology の先驅的文献 Mind in Evolution (1901) を發表した。同書は綜合社會學者 L. Ward の影響を受くる事が大であつたと云はる(註九)。一九〇三年に至つて、自由労働組合 Free Trade Union の幹事長として、自ら労働組合に携つたが、後再び記者生活に歸つて、今度は Tribune 紙の論説を書いた(註一〇)。

彼は Westermarck の Origin and growth of moral Ideas と殆んど同時に、Morals in Evolution と

出版した其翌年即ち一九〇七年、彼はロンドン大學の組織變更と共に労働者大學の稱ある最も民主的な同大學「經濟政治學校」(註一一)に迎へられて同大學の社會學教授となり飽くまでも民衆と共に考へんしたのである。教授は全く「街頭の哲人」と云ふにふさはし(註一二)。而かも、彼の老大方なる社會學體系(四部作)は同大學奉職中完成せられたるものである(註一三)。

而して、本年度のロンドン大學暑中休暇を利用して France, Normandy, Orne dep. の首都 Alençon (註一四)に避暑中六月二十一日幽風一過遂に世界的碩學の士 Hobhouse 教授は白玉樓上の人となられた。行年六十六歳である(註一五)。斯くて彼の London 大學教授としての二十三年間に亘る、輝ける生活は終りを告げたのである。生前教授は各地の講演會に臨んだが、一九一一年四月 Giddings 教授の斡旋に依つて米國 Columbia 大學政治學部 (The Faculty of Political Science of Columbia) から英國思想界の一權威としての待遇で招聘せられたるは、注目すべき事であつた(註一六)。Spencer の "The Study of Sociology" に該當する云はれて居る彼の著作 "Social evolution and Political Theory" (1911)はその講演筆記である。又 Hobhouse 教授は London 大學教授以外に約八つの(註一七) Trade Boards の議長をも兼ねて居たのみならず、英國社會學會の創立者の一人でもあつた。猶英國社會學會雜誌 "The Sociological Review"——以前 Sociological papers と云はれたるもの——の顧問であつた。

以上が彼の略傳である。

(附言)

「故ホッソンス教授追悼會」が、六月廿七日、倫敦メトランド街 St. Clement Danes Church と於つ、その場に催され、氏生前の知友 Graham Wallas, Harold Laski, Sir William Beveridge (Director of the London School of Economics), E. Jenks, T. E. Gregory, T. P. Nunn, Vauchi, Bowley, Seligman, Sargent, Ginsberg, H. C. Guttridge, J. L. Hammond, Wolf, Rojewell Jones, J. A. Hobson, 等の教授が列席せられた。

四ノ下、翌六月廿八日丑午、Wimbleton Parish Church に於て「故教授の葬儀」が挙行された。

(4) 彼の主要著作

(approximately in the order of their appearance)

- (1) 1893. The Labour Movement. Preface R. B. Haldane, 1st Ed. 1893, 98 pp.; 2nd Ed. Lond., Unwin, 1898, vii+98 pp.; 3rd Rev. Ed., N. Y. Macmillan, 1912. 159 pp.
- (2) 1895. Democracy and Reaction. London, Unwin, vii+244 pp. Republ. in pt. fr. the Speaker. (London. Unwin. Press 1904). (N. Y. G. P. Putnam's Sons, 1905.)
- (3) 1896. Theory of Knowledge; A Contribution to some Problems of logic and metaphysics. Lond., Methuen, xx+627 pp. (1) Data (2) Inference (3) Knowledge.
- (4) 1901. Mind in Evolution. (1st Ed.) Lond. & N. Y., Macmillan, xiv+415 pp. (2nd Ed.) Lond., Macmillan, 1915. xix+469 pp. (1) The Standard. (2) The Basis.
- (5) 1905. Lord Hobhouse; A Memoir (Joint author—J. L. Hammond) Lond., Arnold, 1905, iv+280 pp.
- (6) 1906. Morals in Evolution; A Study in Comparative Ethics, (1st Ed.) Lond., Chapman & Hall., (2 vols). New Ed. Rev., N. Y., Holt, 1915, xvi+648 pp. (註) 藤田泰介氏翻譯總論の撰述(未記)
- (7) 1911. Social Evolution and Political Theory. N. Y., Col. Univ. Press, ix+218 pp. (Julius Beer foundation) 12 no., cloth, (1922. 8 vo, pp. ix+218). (註) 十羽松義氏譯 社會進化の政治理論 大正十一年(社會學研究會)
- (8) 1911. Liberalism. N. Y., Holt, v+254 pp. (Home Univ. library of mod. knowl.) (註) 北刺義司氏譯 自由主義(未記)
- (9) 1913. Development and Purpose; An Essay Toward a Philosophy of Evolution. Lond., Macmillan, xxix+383 pp. (1) lines of Development (2) The Conditions of Development. (Revised and largely rewritten 1927)
- (10) 1915. The World in Conflict. Lond., Unwin, 104 pp. "A Series of articles contributed to the Manchester Guardian during March, April, and May 1915 and reprinted with addition." note.
- (11) 1915. The Material Culture and Social Institutions of the Simpler Peoples, An Essay in Correlation, (Joint author with G. C. Wheeler and M. Ginsberg) Lond., Chapman and Hall, iv+299 pp.
- (12) 1916. The Question of War and Peace. Lond., Unwin, 233 pp.
- (13) 1918. The Metaphysical Theory of the State, A Criticism, Lond., Allen & Unwin, N. Y., Macmillan., 156 pp. (Studies in Economic and Political science—No. 5) (註) 鈴木大郎氏譯 國家の形而上學的理論(大正十三年)

- (14) 1921. The Rational good; A Study in the logic of Practice. Lond., Allen & Unwin.; N. Y., Henry Holt, xxiii+237 pp. (註) 藤田泰介氏譯 合理的善の實踐論(大正十四年)四紅社版、ノキヤ書院版、綠陰社普及版、文行社版、佐藤俊雄氏譯 社會哲學概論(昭和三年)綠陰社版)
- (15) 1922. The Elements of Social Justice. London, Allen & Unwin, N. Y., Henry Holt, vii+247 pp. (註) 藤田泰介氏譯 社會哲學原理(昭和二年)早大出版部)
- (16) 1924. Social Development; Its Nature and Conditions, Lond., Allen & Unwin; med. 8 vo, pp. 348. (註) 藤田泰介氏譯 社會的發展其本質の條件 未刊)
- (17) 1924. The Philosophy of Development (contemporary British Philosophy, Personal statements. vol. I. Edited by J. H. Muirhead, pp. 149-188)

(B) 彼の主要雜誌論文

(generally in the order of their appearance)

- (1) "Ethical Basis of Collectivism." Int. Jour. of Ethics. 8: 137-56.
- (2) "Laws of Hammurabi; Liv. Age. 237: 250-3. Ap. 25 '03.
- (3) "Questions of the Lords;" Contemp, 91: 1-11, Jan. 1907.
- (4) "Constitutional Issues;" Contemp, 91: 312-8. Mr. 07.
- (5) "Editorial;" Sociological Review. 1: 1-11 '08.
- (6) "Prospects of Liberalism;" Contemp, 93: 349-58 Mr. 1908.
- (7) "Lords and the Constitution;" Contemp. 96: 641-51 D' 1909.
- (8) "Contending Forces;" English R-4: 359-71. Ja. 1910.
- (9) "New Spirit in America;" Contemp. 100: 1-10 J1. 1911. Same living Age. 270: 323-30. Ag. 5, '11.
- (10) "Prospects of Anglo-Saxon Democracy;" Atlan. 109: 345-52. Mr. 1912.
- (11) "Review of Westernarch's Origin and Development of Moral Ideals;" Sociological Review. No. 2 p. 402 '09.
- (12) "Social Effects of War;" Atlantic. 115: 544-50 Ap. '15.
- (13) "Soul of Civilization;" Contemp. 108: 158-65. Ag. 1915.

- (14) "Sociology as a Study of Correlation," Sociological Review Jan, 1923.
- (15) "Many articles in Mind," Int. Jour. of Ethics.
- (16) "Law and Justice" in Representative Essays by H. R. Steves & F. H. Ristine. (p. 341-375).

(C) ホンソウ思想邦文文獻

- [甲] (1) 戸田 武雄 ホンソウの思想體系(昭和三年十二月經友一二號)
- (2) 關 與三郎 ホンソウの社會學說(早稻田政治經濟學講義錄 昭和四年度十八號 p. 1-58)
- (3) 松本潤一郎 ホンソウの社會學說(社會學雜誌大正十四年十一月一九號 p. 1-20, 十二月二〇號 p. 33-48)
- (4) 松本潤一郎 現代社會學說研究(昭和三年) p. 322-367.
- (5) 松本潤一郎 英米社會學(大思想エンサイ 社會學 13)(昭和三年)
- (6) 古坂 明詮 ホンソウ(大思想エンサイ 社會學 13)(昭和三年)
- (7) 河合榮治郎 英國派社會主義(社會經濟體系 9. 10. 11. 12. 13. 15 卷) 昭和三年
- (8) 河合榮治郎 在歐通信(大正十五年)
- (9) 岩崎 卯一 社會學の人と文獻(大正十五年) p. 337-405.
- (10) 鈴木榮太郎 ホンソウの社會學(現代社會學叢書)未刊
- (11) 松本潤一郎 ホンソウの教授遊々(社會學雜誌第六五號 p. 91-92)
- (12) XYZ氏 ホンソウの死(新自由主義第二卷第九號 p. 29)
- [乙] (1) 長谷川如是閑 現代國家批判 p. 45-89
- (2) 高田 保馬 社會と國家
- (3) 中島 重 多元的國家論
- (4) 浮田 和民 國家哲學
- (5) 思想名著解題(大思想エンサイ 22) p. 260-262.
- (6) 吉田 靜致 道德の原理
- (7) 金子鷹之助 社會哲學史研究 p. 298, 414, 472. (昭和四年)

- (8) 市村今朝藏 近世政治思想史
- (9) 岩崎 卯一 社會學序説
- (10) 松本潤一郎 ホンソウ著「社會的發達」(社會學雜誌七號) p. 101-104
- (11) 綿貫 哲雄 社會心理學(大思想エンサイ 13)
- (12) 河合榮治郎 自由主義

(D) 外國文獻

- (1) H. Carter: "The Social Theories of L. T. Hobhouse." 1927.
- (2) H. E. Barnes: "Leonard T. Hobhouse and the neo-liberal Theory of the State." in American Journal of Sociology 27: 442-485. Ja. 1922. (鈴木榮太郎氏譯 ホンソウの政治理論概要)
- (3) A. K. Rogers: "English and American Philosophy since 1800." pp. 348-351.
- (4) John Morley: "Critical Miscellanies," vol. 4. pp. 265-326.
- (5) H. E. Barnes: Sociology and Political Theory. 1924 (新田出澄氏譯 社會學の政治理論)
- (6) E. Barker: Political Thought from Spencer to To-day. 1924. (小島幸治氏譯 英國政治思想論)
- (7) E. S. Bogardus: A History of Social Thought 1921. (谷田長繼氏譯 社會思想史)
- (8) L. M. Bristol: Social Adaptation. 1915.
- (9) C. A. Ellwood: Sociology in its Psychological aspect. 1912.
- (10) Hankins: Sociology (The History and Prospects of the social sciences edited by H. E. Barnes) 1925.
- (11) L. Rokov: Contemporary Political Thought in England. 1925.
- (12) Sorokin: Contemporary Sociological Theories. 1928.

註 一 彼はハンソウの未だ知らぬ who's who 1929 年版——p. 1455. (published A. and C. Black)——。

註 二 H. Carter: The Social Theories of L. T. Hobhouse. p. 8.

註 三 イギリスに於ける社會主義の發展は主としてケルト族又はユダヤ民族の血を受けたる人々に依つて行はれたものであつた。かゝるが故にか、ケルト族の血が流れてゐる Caroline やその母ケルト Leonard Trelawny Hobhouse は、始め社會主義を信奉し漸次 New Liberalism へ轉向したるが如く。cf. A. Menger: The Right to the whole

Produce of Labour. Introduction. 森戸辰男氏譯本 p. 370. 因々 Sir William Trelawny は第九代目の F. A. Baronet として八〇〇〇 acre の大地主である。

註四 Emily Hobhouse は南アフリカの社會事情研究家の先驅者なり。cf. Carter: *ibid.* p. 10.

註五 Hobhouse: *Philosophy of Development—Contemporary British Philosophy* edited by Muirhead vol. I. p. 150

註六 H. Carter: *ibid.* p. 9.

註七 教授の愛妻 Nora は一九二四年に永眠してゐる。二人の間は長子 R. Oliver Hobhouse (R. A. F.) (歐洲大戦に際して飛行中尉として活躍せられたる人) 及び二女の三人の子がおり、Oliver と同じく Hobhouse 著 *Metaphysical Theory of the State, Dedicatio* p. 57 参照せられたる。尙長女は John Beighton 氏に嫁せり。Democracy and Reaction (1895) は當時の代表作である。同書は一八九五年のソールズベリー内閣の殖民大臣 Joseph Chamberlain 等の帝國主義的統一黨員 (Imperialistic unionists) に對する九個の反駁文から成つてゐる。民主的自由主義を高唱す。

註九 cf. Hobhouse: *Mind in Evolution. Preface.*

註一〇 一九〇五年労働組合の幹事長を辭し、直ちに London の *The Tribune* 紙の論説記者となつたがこれは一年程しか続かなかつた。然し此の一ヶ年間に於いて、彼は左翼自由主義の旗の下に Old age Pensions, Trade Boards, Land Reform 及び戦争賠償金問題等に關係した當時、Hobhouse は *Tribune* 紙を通じて Lloyd George を援助するやうなことがあつた。

註一一 舊式な二つの大學に對抗した Bantian 一派の功利主義の人々に依つて創設されたのがロンドン大學であつた。The London School of Economics and Political Science. University of London. Houghton Street. Aldwych est. 1895. joi 1907.

註一二 故教授の講座は左の如くであつた。

前學期(十月—十二月) 社會哲學、社會學序論、應用社會哲學、

後學期(二月—三月) 社會學序論、應用社會哲學、比較心理學、社會心理學、

尙、ロンドン大學の内容及 Hobhouse 教授の講座については岩崎卯一氏 *社會學の人と文獻* (p. 343-344) 及び

社會學雜誌(第七號)一〇四頁を参照せられたる。

註一三 岩崎卯一氏 *社會學の人と文獻* (p. 376)

註一四 フランシス Garthe 河川のぞみ古來 Alencon レースを以て知らる、人口二萬の都市。

註一五 但し滿六十四歳である。而して *The Times*, June. 27. p. 1. に依れば教授の病名は腦出血である。

註一六 岩崎卯一氏 *社會學の人と文獻* (p. 369)

註一七 H. Carter: *The Social Theories of L. T. Hobhouse* p. 11.

三 認識論上におけるホッブハウス

今哲學より社會學に至るホッブハウスの思想體系を述べやう(註一)。

ホッブハウスの依れば、知識の理論は、先づ吾々をして、合理的規準とは何を意味するかといふ疑問を起さしめるものである(註二)。彼に依れば、凡そ合理的といふ事には三つの要件を必要とする(註三)。

第一に、それは矛盾なきことである。矛盾は疑ひもなく不合理であるからである。即ち思想の世界に於て、相互に矛盾する二個の判断を許し、行動の領域に於て相互に破壊する二個の目的を追求するが如きは不合理である。第二にそれは、根據あることである(註四)。專斷的、即ち無根據の判断は不合理であらう。何等の根據なくして、判断をすることは、不合理と云はなければならぬ。無根據の判断を避けんとするならば、吾々は、判断をそれを超克するところのものと連結することが出来なくてはならない。この相互連結の偉業は主たる理性の積極的職分であるであらう。第三に、それは個人的主觀にのみよることなく客觀的なものでなくてはならない、即ち判断を感動、或は願望、若くは或る「主觀的」態度に依るのは——單に吾々自身から起る所の衝動等の上に根據せしむ

ることは——不合理であると主張される(註五)。

然しながら彼が云ふが如く、客觀的なものは不幸にして、即時に、誤謬なく、主觀的なものから區別し得る程、明瞭なものではない。如何にして此の區別をするかと云ふ問題に對して Hobhouse は合理性の前記の三要件に依るのであると答へられてゐる。

さて、第一の矛盾ありや、否やは如何にして知らるゝや。彼に依れば、或る判断があれば、それ以外の他の判断と連結せしめ、その相互關係に於て矛盾ありや否やを知るにあつたのである。然しながら、これは所謂相對主義であり、積極的に真理の要件を闡明するものではないであらふ。こゝに於てか、彼の真理の規準に於て重きをなすものは、其の第二の要件たる根據あることであらふ。されどこゝに根據ある判断は、真理なりとするも、彼自ら認むるが如く、この事は根據そのものが正しからざればそれは意味をなさないものである。根據そのものが今や根據を必要とするのである。即ち更らに何等の辯證をも要しない或る一次的の根據がなければならぬのである。果して、然らば、此等の一次的の根據を肯定する判断は孤立的判断であらうか(註六)。斯くして Hobhouse が最後に認めたるものは孤立的 immediate judgement 即ち——the most general grounds and the final particular fact——*éxacta* これである(註七)。然らば、合理的根據に對する探求は immediate judgement のうちに終るのであらうか。

斯くて Hobhouse は自然的實在論の古に復歸して「知覺は存在である」と云はんとするのであらうか。否、知覺に於て immediate judgement が窮極的なものならざることは Hobhouse の認むるところである(註八)。

彼は云ふ、「吾々は棒が水中では、空中で眞直ぐなものと特に同様に、直覺的に曲つてゐる事を見る

のである。然し此の場合に於て正しいのは immediate judgement ではない。感官の immediate judgement は更らに試験、批判、確證を経て確實性を得るものである」と。吾々は常にある判断から他の判断へ訴へつゝ其の相互關係を見てゐるのであつて、あらゆる疑問を超越した絶對といふやうな點を發見することは出来なす。

斯くて、思考は質の悪い車輪のまわりをめぐり廻つてゐるに過ぎないのである。寔に immediate judgement が全く無價值であるならば、吾々は當惑せざるを得ないであらふ。蓋し零は如何に集つても零であるからである。然しあくまで調和を忘れず、あらゆる絶對を否定する Hobhouse は感官の immediate judgement に對しても亦、絶對に價值なしとはせず、終極的なものではないが、暫定的價值を有つ」と云つてゐる(註九)。即ち彼によれば、感官の immediate judgement はそれ自身有つところの或る程度の有力性と明白性をもつて、吾々に迫り來るものであつて、それは表面的に真理であり、經驗は斯くの如き判断が應々にして、相互に矛盾衝突するが故に、訂正を必要とするものであることを示すに過ぎない。斯くて immediate judgement は相互に確證し合ひ、其の方法に依つてのみ暫定的價值は確實性を有つに至るのである。斯くの如き相互關係の體系中に入り來る判断は、其の體系を支持し、又それによつて支持せらるるのである。「全體は諸々の部分に依存し、その代り其の諸々の部分を支持する。而してこの相互關係を通じての相互扶助の有機的原理こそ理性といはるゝものである」と(註一〇)。

而して不完全ではあるが進歩的である限りに於て、それは有機的衝動であると名附けらる(註一一)。以上の簡單なる紹介によりても知らるゝが如く、Hobhouse は吾々が單に或る刺戟に應じて形成する判断を immediate judgement と稱し、その特殊なるものを感官の判断とするのであるが、又彼

は immediate judgement の一般的なるものを直覺判斷 (intuitive judgement) と呼んで居る。Hobhouse はこの直覺判斷に就いても、その各々に暫定的價值を與へ、感官判斷に於けるが如く、その確實性はたゞ他の判斷との相互關係に於てのみ要求する事が出来るとする。斯くて Hobhouse に依れば(註一三)、理性は相互連結の原理であつて、その發見の歸結が眞理であると云ふのである。

而して、實在の全體は吾々の經驗に包括し盡し得ないが故に、その相互連結の原理は決して完成されたものではなく、従つて理性はその解釋に對して終極性を要求し得るものでもない(註一三)。而して、合理的なるものは、現在符合する諸判斷の體系へ組み入れられたものである。猶 Hobhouse の見たる實在は相互依存關係にある諸要素の體系であつて、そのうちには目的論的要因と機械論的要因とが並立するのである。而して前者は即ち心であつて相互依存關係に於ける交互作用によつて調和に向つて働くものである。後者は此の相互作用依存關係にあらざる諸の要素がそれである。

以上吾々は合理的規準を尋ねて Hobhouse の論述を偲び、理性が遂に有機的衝動であり、その職分は經驗の調和であるであらうといふ見解に達したのである。彼は認識論上の主觀として心理的、生理的なる經驗的自我より出發して、常識的に存在するものを心の外部に實在するものとしてゐる、即ち彼の見たる人間は全く自然の子であつた(註一四)。

換言すれば、Hobhouse の認識的主觀は心理的、生理的、個人的なる經驗的自我であり、その立論は發生的である。即ち常識的考へ方である(註一五)。

さればその理性もあくまで、衝動に側せらるるものであつた。この點より見れば Hobhouse 教授は心理學者である(註一六)。

次に、Hobhouse 氏は自我實現說に對して次の如き立場を取つてゐる。即ち(イ)善の感情的要素

を過少價したること、及び(ロ)自己犠牲と云ふことに關して、余りに樂觀的なることを論難してゐる(註一七)。

各人の人格の完全なる調和的發展——社會的人格——は共同善の條件であり、社會的調和が完成されたならば、その全體の善、即ち共同善は各個人の善の綜合であると云つてゐる。然しながら、元來社會的調和は道德的紛糾の條件の許に徐々として發生し來り、發達して行かねばならぬものであつて、それは事實完成するものではないのである。されば、一定時に於ける社會的秩序の實際的必要は、より高き調和に於て認めらるる發展を切斷しなくてはならないのである。即ち、或る個人は犠牲とならなくてはならぬことがあるであらふ。この個人は明らかに、彼の幸福が存するところの内部的調和の發展を成就しないものであつて、此の場合、犠牲にされたものは社會的人格として共同善に對する個人的寄與をなす所のものである。然らば、斯くの如き犠牲は實に手段であつて、目的ではない。即ち、それ自ら善なるものではない。犠牲がなされねばならぬといふことが現在の社會的秩序を進歩せしむるために要求されるならば、その事情に於てのみそれは社會に取りても、個人に取りても亦最善なるものである。

然しそれは個人に取つて、一般に個人が到達せねばならぬものは、個人の幸福であるといふ意味で善なるものではない。合理的なる善とは後に述べるが如き獨立單位としてこの個人に對する善ではなく、個人がその一部分を構成してゐる所の全體の善なるものである(註一八)。

されば、あることが善であつて、それが根據あるのはそれが全體の善を増進させるが故である。而して、その善が完成されたならば、こゝに考へるやうな個人の犠牲といふやうなことは意味しない。自己犠牲と云ふ個人の義務はその全體に對する關係に於てつくられたものである。されば假令、

吾々が自己犠牲に於て、個人はその最善をなすものであるといつてもそれは自己目的ではない。人が犠牲に依つて失ふものは、彼の人格及び、それに附随するところの幸福であり、而して得る所のものは、窮極の調和といふ意義をもつてゐる。即ち彼の生活と、より廣き生活との全體的同一化である。これは嚴酷なる事情が彼に割り當てるものであるといふ意味に於て、それは彼の善なのである。然しそれは理想的調和が彼にわりあててゐるものではないと云ふ意味に於て又彼が若し彼自らの立場から事實を考察したならば、彼が選擇したであらうところのものでないといふ意味でそれは彼の善ではない。

然らば、自己犠牲に於て、個人はその善を失ふものであるか否かと云ふ問題に對しては、その意味する内容に依つて或は肯定し、或は否定しなくてはならない。彼はその善が、社會全體の善と對立するものと考へる限り、彼はその善を犠牲とするものである。この犠牲に對する理由は彼にとりての善なるためではなく、只々全體の善のためである(註一九)。即ち Hobhouse が如何に唯名論的個人主義者であるかは、理想主義者にとりて用語の矛盾と思はれるのである——此の「社會全體の善と對立する」個人の善を考へることに依つても明らかであるが——。

而して斯くの如き犠牲の必要は、實に現在の社會秩序の不調和に基くものである。斯くて Hobhouse 教授は『自我實現と云ふ言葉は倫理學上の根本的難關を、余りに樂觀的に解決するものであると斷案を下してゐる。吾々は上述の紹介によつて粗略ながら Hobhouse の基石とする所のものを考察し得た。即ち哲學者としての氏は經驗的進化論者であり(註二〇)、結果論者であり、その窮極の立場は英國の傳統的自然主義であつて、特に J. S. Mill の經驗主義のよき後繼者である(註二一)。次に Hobhouse は倫理學上の絶對説と快樂説とを巧みに採長補短する事に成功してゐる。氏は

The Rational good の最後の章に於て(註二二)、ミルの功利主義に對する自説の類似と差異とを述べ同時に Green の理想主義に對しても自説の立場を明らかにしてゐる(註二三)。吾々は纏つて、彼の功利主義に對する批判をさして以つて、彼の認識論上の若干研究を終りたい。

Hobhouse は、先づ、功利主義の快樂と幸福とを同一視する事に反對する。經驗と感情との調和は快樂又は幸福の形に於て意識のうちに現はれる。されば Bentham は幸福を以つて苦痛の欠如、即ち快樂を意味するものとなし、J. S. Mill も亦幸福は快樂の總計なりと云つた(註二四)抑も快樂とは其の時に依つて強弱大小がある。一時的なる心の状態である幸福とは快樂と同一の感情の調子を持つた心の状態であることに相異なる。即ち感情を除いては何の幸福もあり得ないであらう。然し幸福と快樂とを同一視してはならない。幸福といふ時、吾々は全體としての人格の或る安定的、恒久的なる條件を快樂に見出すことは出来ない。随つて、幸福に於ける満足には二つの條件が必要であらう。

第一には、心が内部的調和の状態にあること。

第二には、吾々自らの生活を超越したある對象が必要なるものであること即ちこれである。

綜合原理たる人格と、綜合の素材たるところの繼續的衝動及び經驗との間には思想上明白なる區別があるであらう(註二五)。

註 一 Hobhouse が「哲學」に與つたる形式的定義とは、即ち「哲學は實在一般の一個の合理的解釋の試みである」(關與三郎氏ホッブハウスの社會學說 p. 6)「Philosophy is the attempt at a rational interpretation of Reality as a whole. In the course of its development it has given rise to numerous special sciences, each of which is the attempt at a rational interpretation of Reality in some part or under some aspect.—contemporary. B. Philos. I.

The Scope of Philosophy p. 151.」云々の如き。Hobhouse の哲學は英國傳統の經驗派の特質を備へてゐる。(關氏上掲書 p. 8) 英國傳統の經驗派哲學とは大陸の哲學——即ち(1)合理的演繹的方法(2)本體論的特質(3)形而上學的思辨的興味を有するもの——に對して(1)實驗的歸納的方法(2)認識論的特質、知識論的特色(Locke の心理學的特色を擧げたる)(3)實踐的論理的興味の特質である。が然しその形式的特点は枚擧し難き。cf. H. A. Taine: History of English Literature, 1863. introduction, H. T. Buckle: History of Civilization in England. vol. I. p. 213. 河合榮治郎教授著 英國派社會主義 上掲書 p. 18-20)

而して、ホンソウヌの哲學の特質とは(1)彼が重要な如何なる意味に於ても先天的にして、且つ經驗以外の要素をその認識の成立過程に於て必要視せざる點(Cf.: Theory of knowledge, introduction), (2) Green の精神的原理をトリニチキに示唆を得る経験的理解たる事に依りて A. Comte の「人道」の概念に到達したる點(Cf.: Theory of knowledge Part. II. Chaps xiv. B. C. B. Philos. p. 150), (4) 經驗科學を哲學の世界に於て重視する點に於てソウキヤク。(Contemporary, B. Philos, p. 152) 又内容的に見て Hobhouse の哲學は實在論的でも有する。而して眞理は徐々たる其の形相を現はすものを見る考へる點に於て Hobhouse は彼自身「Philosophy of Development」發展の哲學を稱してゐる。(C. B. Philos. p. 151) 即ち一種の進化哲學の如きものである。從つて Hobhouse の哲學は眞理認識として相對論的傾向を持つものである。經友一二戸田武雄氏キアンソウの思想體系 p. 81, H. Carter: The Social Theories of L. T. Hobhouse. p. 132. The works of Hobhouse will long endure as the monument to a great intellect and a colossal attempt to bridge the distance between philosophy and a science of society)

- 註 一 Hobhouse: The Philosophy of Development. p. 154
- 註 二 Hobhouse: The Rational good. pp. 56-57. 藤田氏譯本 p. 103. 佐藤氏譯本 p. 103 松本潤一郎 現代社會學說研究 pp. 332-333.

- 註 四 Hobhouse: The Rational good. pp. 56-57. 同譯本(佐藤氏) p. 103.
- 註 五 op. cit., 譯本 p. 104
- 註 六 Hobhouse: ibid. 譯本 p. 106
- 註 七 ibid. p. 58. 同譯本 p. 107.
- 註 八 經友一二號 戸田武雄氏「ホンソウヌの思想體系。——而して、又 Hobhouse は直覺判斷をある意味に於て肯定し、ある意味に於て否定してゐる。」
- 註 九 cf. Hobhouse, The Rational good. ch. iii. The Rational.
- 註 一〇 經友一二號 戸田武雄氏上掲論文 p. 83 此の相互關係の體系に入り來る判斷はその體系を支持すると共に又それに依つて支持される。此の相互支持の有機的原理こそは Hobhouse の理性である。
- 註 一一 cf. Hobhouse. ibid.—譯本 p. 120
- 註 一二 cf. ibid.
- 註 一三 戸田武雄氏「上掲論文 p. 83
- 註 一四 Soc. Eyo. & Polit. Theo. p. 116. 社會學の取扱ふ所のものは人である。彼の見たる人は自然の子である。
- 註 一五 即ち具體的的人的存在に就いて考へるの意味であり、常識的に「在る」といふ客觀的事實より出發することに於て明らかにフランス哲學の傳統を引くものであらう。戸田武雄氏上掲論文 p. 84)
- 註 一六 Hanks 氏は Hobhouse 氏を集團的心理學派に入れ、協働關係を説く C. A. Elwood, C. A. Cooley, R. M. Mac-trer の回顧して。 (Hanks: Sociology—The History and Prospects of the social science edited by H. E. Barnes, p. 314) 又集團説を説く I. F. Ward, L. Stein の回顧して。 猶、Hobhouse の社會學說上の地位に關しては、松本潤一郎氏 現代社會學說研究 (pp. 322-327) を参照せられたし。
- 註 一七 cf. Hobhouse, ibid, pp. 141-145. 戸田武雄氏上掲論文 p. 87.
- 註 一八 C. B. Philos. p. 154 には「合理的なるものは何であるか、而して吾々は何が故にそれに對して最高の位置を與へるのであるか、之れに對する一般的な解答は左の如くである、即ち合理的なるものは我々が理解し得る限

りに於て、明らかに表現せられて居る全體 (articulate whole) なのである。そしてそれ故に合理的なるものは如何なる部分 (part p. 12) よりも上位を占めて居る」こともあり、而して早大教授關與三郎氏は右の文を引用せられて、注意すべき諸點を左の如く列擧して居られる。(關與三郎氏、ホッブハウスの社會學說 p. 12)

(A) (I) 合理的者は明瞭に表現せられたる (II) 全體である。

(B) 明瞭に表現されて居る (articulate) と云ふのは有機的又は組織的の意味であらう。

(C) 全體 (whole) —— これは「我々が理解し得る限り」に於て「の全體である。そこには進化を容るゝ餘地があるのである。それ故に合理的者も亦科學的原理たる「進化」を離れることは出来ない、かく全體は進化するが又それは「綜合」に於て包括せられる。即ち——全體は綜合に依る概念である (C. B. Philos. p. 152)

(D) 全體は部分の上位である——「The whole is Primary, the separate cells have relatively little independence and the organs become depressed almost to the level of instruments. (C. B. Philos. p. 168)

p. 13-15)

斯くして關教授は合理的者と綜合的者との比較をこゝろみられて居られる (p. 13-15)

註一九 C. B. Philos. p. 154.

註二〇 松本潤一郎氏、英米社會學 上掲書 (p. 150)

註二一 Hobhouse の合理的善なるものは吾人の心的諸要素の現實の傾向を肯定し且つ之に立脚せるものである、合理的善は外部から與へられるものでは無くして、「いはゞ吾人の心意から生み出さるゝものである、従つて根本に於て氏は自然主義に據るものと認めねばならぬ」(松本潤一郎、現代社會學說研究 p. 355) (C. B. Philos. p. 150)

註二二 *ibid.*, chap. viii. Implication. p. 137-162. 同譯本 (p. 271)

註二三 松本潤一郎、上掲書 (pp. 335-336)

註二四 J. S. Mill の倫理學說は所謂功利主義であつて、Bentham の最大多數の最大幸福が道德の標準であること云ふ所の快樂說乃至幸福說を信奉せるものである。即ち Bentham の科學的快樂說 (scientific Hedonism) を採る。

註二五 前者には意志 Will なる行動の方式と幸福なる感情の方式とがこれに屬する。後者には慾望 Desire といふ意欲

の方式と快樂苦痛の感情の諸方式とがこれに屬する。——cf. Hobhouse The Rational good. pp. 137-183. 同譯本 (p. 272) 戸川武雄氏上掲論文 (p. 87) を参照せられたる。

四 社會哲學上に於けるホッブハウス

彼の社會哲學は彼の論理學の一部門にして、それを通じて彼の哲學に關係してゐる (註一)。

即ち、Hobhouse に依れば凡て人間は夫々他人に對する無限の關係の裡に在る一つの中心であつて (註二)。意義的なものにもせよ、然らざるものにもせよ又協同的なものにもせよ、然らざるものにもせよ、その關係は、一般に社會的といはれ、その本質は心的相互作用 (The Interaction of minds) である。

斯くの如く複雑なる網狀をなせる社會的關係は一定の限界ある全體を形成するものではなく、無限に擴がり、一定の始めも終りもなき構造をなすものである。然しながら、此の無定形の構造のうちには吾々はその相互關係が永續的にして限定された人類の集團を認めることができる。斯くの如き集團は吾々が一般に社會と呼ぶものを構成する。嚴密に云へば人類の起源を除いて社會の起源といふやうなものはない (註三)。

是等のうちの最も簡單なるものは配偶關係、親子關係であつて、そこに血縁關係が発生する。恐らく重婚に依つて、異なる家族は次第に共同社會なるものをつくるに至つたのであらう。その起源は扱て措き、一般に共同社會は共同の情緒乃至利害關係に基くものである。それは未開人の間には稀なることであつて、斯くの如き平和的秩序ある關係に根本的に必要なることは、各人が他人に對する關係を明確に理解承受してゐると云ふことである。されば、斯くの如き社會は其の吾々の構成員に依つて、一般に、承認されたる行為の共同規律の體系に依るものであつて、その社會の情緒

に依りて、又は或る統制の機關に依りて、維持せられて行くのである。是を要するに、共同規律を持つ全人間は共同社會を構成する。而してその社會的關係は無限に分岐する(註四)。

然れども、それが特殊の統一を有つ社會的構造を生ぜしめないならば、共同社會を構成するものではない。共同社會の形成に必須なるものは指定しうる限界をもつた或る特定の構造の人間が一般に承認された共同規律を守るといふ事であつて、構成員は共同の情緒或は利害關心に依つて結合せられ、形式上の構成と統治とは必ずしも共同社會の必須なる條件ではないのである(註五)。

これらの規律は無意識的なる慣習から漸次發達して法律並びに形式上の權利となるのである。社會制度なる語は Hobhouse に依れば、

(1) 人的關係、又は他方に於ては或る特殊なる職能を營むために結合せる人類そのもの、或は(2) 人間の或る關係を支配する所の承繼され建築された諸慣例、或は(3) 斯くの如き慣例の全體及びそれを支持する原理、或は(4) 斯くの如き全體を支持する組織をいふのである。

之を要するに、制度は一方に於て人的關係の表示であると共に、他方に於ては、或る特殊なる職能を營むために結合せる人類そのものを指示す。Hobhouse は制度といふ時上述の如き諸關係、並びにその全體及び原理を指すものとなし、或る特定の職能を營むために結合せる人類の組織を特に結社 (association) と名づけてゐる(註六)。

即ち、共同社會のなかには學校、教會、組合、政黨の如き多數結社が存在なし、何づれも限定されたる職能を有つてゐる。然しながら、結社はそれ自ら完全なるものではなくして、共同社會の生活の一部分をなすものに過ぎない。而して國家は共同社會の共同規律を維持するための機關である。即ち共同社會と云ふ時、吾々はそれに依つて共同規律が維持せらるゝ、法律、統治、防禦の構造を意味する。されば、國家は共同社會ではない(註七)。

それは、諸制度の體系であり、従つて結社である(註八)。

民主的國家に於てはその構成員は即ち共同社會の構成員である。それ故に、國家は或る目的のために組織された共同社會と考へられることがある。然し國家の諸制度は共同社會の全生活の一部分を構成するものに過ぎないのである。民主的ならざる國家に於ては、國家は共同社會の一組織たるに止まる。否、共同社會をも持たぬ單なる組織たることすらあるであらう。斯くの如き場合に法律を共同社會の意志を表現するものと考へるが如きは疑ふべきではあるまいか。こゝに於てか國家は要するに主たる職能、即ち法律の規定實施、及び共同防禦が分化調節される一構造たるに過ぎないのである。

以上は Hobhouse の社會及び國家に對する見解である(註九)。

要するに、氏の社會哲學は社會生活そのものの價値の論究であり、理想の闡明であつて、メエリス及びリッケルトの歴史哲學の如き文化價値の全體的考察乃至シュタムラーの社會哲學的考察ではなく、むしろ氏の社會哲學は Mackenzie の社會哲學に類するものであらう(註一〇)。

而して、氏の社會哲學とは社會生活の目的、理想を闡明する事であつて、政府の行ふ政策たる個人が行ふ行爲たるを問はず、凡そ社會を現在より住心地良き人の世たらしめんとする凡ての行動に不可欠の要素であり、斯かる社會哲學の闡明する目的理想が事實的社會進化の上から可能の事であるや否やに依つて、社會哲學の價値は判定さるゝ可きものであると云ふのが彼の根本思想であらう(註一一)。

而して、Hobhouse に於てはその社會哲學は道德哲學(倫理學)の少くとも一部分であらう(註一二)。